

みららびき

令和4年3月
第138号
東京都立錦系小学校
情緒障害
教育研究会

新たな転換期を迎えた特別支援教室の

在り方と都情研の果たす役割

東京都立錦系小学校情緒障害教育研究会会長

墨田区立錦系小学校長 伊藤 康次



◇「研究大会兼秋季セミナー」から 都情研の役割を考える

昨年、十一月十六日（火）、「第六

回夏季研究大会兼秋季セミナー」を墨田区立錦系小学校をサテライト校とし、全都五校の小学校をオンラインで結び、開催いたしました。講師の先生として、「Space Zero PDD 心理・教育研究所所長 水野 薫先生をお招きし、「特別支援教室の指導とは」ASDを中心に年代ごとの発達課題を考える」という演題でご講演をいただきました。大変多くの示唆に富んだご講演で、私自身たくさん学ぶことができました。特に、「親亡き後ではなく、『親を看取る』立場となる」という言葉に、私たち特別支援教室に関わる者の「使命」を感じました。

これまで私は、特別支援教室拠点校の校長として、機会をつくって、授業を参観し、当該の教員と話し合

いながら、より児童の特性に沿った指導方法や教材の開発、分析について考えてきました。

しかし、その時、私自身の意識の中に、「この子の将来を見据える」という視点がどこまで入っていたのだろうかと自らのこれまでの関わり方を振り返らざるを得ない気持ちになりました。

◇「特別支援教室運営ガイドライン」 から都情研の役割を考える

令和三年三月に東京都教育委員会から出されたガイドラインは、例えば「原則の指導時間」の問題をどのように理解し、制度として具体化していくべきなのかなど、大きな論題となっています。各区市町村においても、このガイドラインを受けた運営方針が示されているかと思えますが、ここで私は一つの懸念を抱きました。それは、「拠点校の在籍学級担任はもとより、巡回校の先生方は、このガイドラインの内容をどの

掲載内容紹介

【本誌5ページ～8ページ】

令和三年度都情研夏季研究大会兼秋季セミナー記念講演（抄録）

「特別支援教室の指導内容とは」

ASDを中心に年代ごとの発達課題を考える」

(Space Zero PDD心理・教育研究所 水野 薫 先生)

程度理解しているのだろうか」と：

◇これからの特別支援教室の在り方 を見据えて

令和三年、都内全ての小中学校に設置が完了し、都立高校においても通級による指導が始まり、特別支援教室の教育は、一つの転換期を迎えていると認識しています。

この間、支援を必要としている児童・生徒の急増に伴い、若手教員や特別支援教育の経験の少ない教員もまた増加の一途をたどり、指導力の向上、人材育成は、喫緊の課題となつていきます。

このことは、今後も解決すべき最重要課題であることには間違いはありません。しかし、私自身の反省として、「指導力の向上・人材育成」の力点を「授業力の向上」に重きを置きすぎた感があるのではないかと感じます。

すなわち、「何のために」指導しているのかという目的論ではなく、「どう指導するのか」という方法論に偏りすぎていなかったかと感じています。「何のために」は、もちろ

ん「その子が生きる」ためであり、「豊かに生きる」、「その子らしく生きる」ということです。巡回指導教員と在籍学級担任、管理職、全ての教職員が、特別支援教室における目的をしっかりと共有すること、同じ目標に向かって、今、どのような指導、支援が必要なのかを協議し、協働すること、そのための校内体制を確立するために、私たちが主体的に推進していくことが大切だと考えます。

このことは何も新しいことではありません。新たな制度が設計されても、目指すべき教育の本質は変わらない、変えてはいけないのだと認識を強くしたところです。

この「変わらない教育の本質」を担っていることこそが私たちの誇りであり、やりがいであり、また、果たすべき役割なのだと考えています。

今こそ、拠点校、巡回校の枠を超えて、全ての公立学校の特別支援教室の充実・発展のために、全力で取り組む所存です。

令和3年度 東京都公立学校情緒障害教育研究会 活動報告

研修会名	企画	期日	時間	場所	内容・テーマ・演題	講師等	参加者数		
定期総会・記念講演会	本部 南	4月20日	14:00	品川区立総合区民会館『きゅりあん』大ホール	記念講演 演題「学校経営の視点から特別支援教室を考える ～指導の充実と専門性の向上を図るためには～」	創価大学 教職大学院 教授 渡辺 秀貴 先生（本会元会長）	494		
				オンライン（急遽オリンピックセンター会場のみを中止し、事後オンライン研修に変更した）			112		
	定期総会・記念講演会 合計（人）							606	
第1回ブロック研修会 （入門研修）	東	5月25日			新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の延長に伴い開催中止				
	北	5月25日							
	南	5月25日							
	多摩南	5月25日							
	多摩北	5月25日							
	第1回ブロック研修会 合計（人）							0	
第2回ブロック研修会 （入門研修） （合同入門研修①に変更）	東	6月22日	14:30	江東区立第五砂町小学校（サテライト会場）	都情研入門研修①（サテライト方式動画視聴・ZOOMオンライン研修にて実施）	西東京市立東伏見小学校特別支援教室 指導教諭 上山雅久 先生	95		
	北	6月22日	14:30	中野区立鷺宮小学校（ホスト会場）			101		
	南	6月22日	14:30	世田谷区立京西小学校（サテライト会場）			111		
	多摩南	6月22日	14:30	府中市立府中第三小学校（サテライト会場）			100		
	多摩北	6月22日	14:30	昭島市立中神小学校（サテライト会場）			92		
	オンライン動画視聴研修								260
	第2回ブロック研修会 合計（人）							759	
第3回ブロック研修会 （教室・学級運営） （合同入門研修②に変更）	東	7月13日	14:30	江東区立第五砂町小学校（サテライト会場）	都情研入門研修②（緊急事態宣言発令のため、サテライト会場の集合研修は中止、動画視聴のみのオンライン研修にて実施）	あきる野市立多西小学校特別支援教室 主幹教諭 中村敏秀 先生	541		
	北	7月13日	14:30	練馬区立石神井東小学校（ホスト会場）					
	南	7月13日	14:30	大田区立南蒲小学校（サテライト会場）					
	多摩南	7月13日	14:30	調布市立杉森小学校（サテライト会場）					
	多摩北	7月13日	14:30	昭島市立中神小学校（サテライト会場）					
	第3回ブロック研修会 合計（人）							541	
会報「みちびき」136号発行	本部	7月	会報「みちびき」136号発行 公立幼・小・中学校等全校配布 計2300部						
中学校課題研修会	本部	8月20日	13:30	北区立王子桜中学校	中学校特別支援教室、自閉症・情緒障害特別支援学級 実践報告 各区市町村運営状況、課題、指導事例、教材紹介など情報交換 （感染症対策のため、2会場に分けて計画したが、緊急事態宣言発令のため集合研修を中止し、北区立王子桜中学校においてパネルディスカッションの動画を撮影収録）	西東京市教育支援アドバイザー 渡辺 圭太郎 先生	0		
			13:30	府中市立府中第三小学校			立川市立立川第三中学校指導教諭 中村 章 先生	0	
	中学校課題研修会 合計（人）							0	

第4回ブロック研修会 (専門研修)	東	9月7日	14:30	*緊急事態宣言発令中のため、集合研修を中止し、内容を変更して、動画視聴のみのオンライン研修にて実施	中学校課題研修会 第1部または第2部のどちらかを選んで、原則研修時間内に動画を視聴し、可能な限り、視聴後に所属校内で意見交換を行う。 第1部 中学校特別支援教室の指導に関するパネルディスカッション 第2部 中学校自閉症・情緒障害学級の指導に関するパネルディスカッション	講師：西東京市教育支援アドバイザー 渡辺 圭太郎 先生 進行：中村 章 先生(立川市立立川第三中学校指導教諭/本会企画運営本部調査係) 第1部パネラー：海川 政子 先生、都志 史也 先生、西島 明佳 先生、高松 慶多 先生 第2部パネラー：齋藤 典子 先生、菊岡 典代 先生			
	北	9月7日	14:30						
	南	9月7日	14:30						
	多摩南	9月7日	14:30						
	多摩北	9月7日	14:30						
	第4回ブロック研修会 合計(人)							759	
第5回ブロック研修会 (専門研修)	東	10月12日	14:30	墨田区立中川小学校 墨田区立梅若小学校 墨田区立菊川小学校	「特別支援教室でつきたい力について考える」(ホスト校中川小学校からの配信によるサテライト方式)	講師：西東京市教育支援アドバイザー 渡辺 圭太郎 先生	75		
	北	10月12日	14:30	北区立滝野川第三小学校(共同ホスト校) ミニサテライト校 56校	「特別支援教室で求められる学習動作の指導について～新型コロナ対策も視野に入れて～」(講師がホストとなるミニサテライト方式によるオンライン研修)	講師：神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部教授 作業療法士 笹田 哲 先生	243		
	南	10月12日	14:30	大田区立おなづか小学校 大田区立南蒲小学校 世田谷区立松沢小学校	「WISC-IVの結果から読み取る具体的な支援」(講師がホストとなるサテライト方式によるオンライン研修)	講師：公認心理師 大六一志先生	144		
	多摩南	10月12日	14:30	八王子市立由井第一小学校 体育館	「視覚認知と発達支援～視覚認知の検査と評価及び指導について～」	かわばた眼科 視覚発達支援センター センター長 築田 明教 先生	139		
	多摩北	10月12日	14:30	昭島市立つつじが丘小学校 体育館	実践報告「フリーズしてしまう女児への対応 ～小4から卒業までを中心に～」	実践報告者：あきる野市立多西小学校 関村 由貴 教諭 講師：Space Zero PDD 心理・教育研究所所長 水野 薫先生	130		
	第5回ブロック研修会 合計(人)							731	
第6回夏季研究大会 (東ブロック大会) 兼 第5回都情研セミナー	本部	11月16日	14:30	墨田区立錦糸小学校(大会本部、ホスト校) 江東区立第五砂町小学校 杉並区立富士見丘小学校 世田谷区立船橋小学校 府中市立府中第三小学校 昭島市立中神小学校	大会テーマ「特別支援教室における特性に応じた指導の工夫～発達段階と適時適切な指導について考える～」 (1) 都情研実態調査報告 (2) 記念講演「特別支援教室の指導内容とは～ASDを中心に年代毎の発達課題を考える～」 (ホスト校からのDVD動画視聴とZoomによる質疑応答)	実態調査報告者：立川市立立川第三中学校指導教諭/本会企画運営本部調査係 中村 章 先生 講師：Space Zero PDD 心理・教育研究所所長 水野 薫先生	536		
第6回ブロック研修会 (専門研修)	東	12月7日	14:30	江東区立第五砂町小学校	『事例を通して実態把握の仕方・指導内容の組み立て方を学ぶ～発達検査の結果をふまえて～』	講師：公認心理師 大六一志先生	132		
	北	12月7日	14:30	豊島区立池袋本町小学校	「小学校の特別支援教室で指導すべきこと～発達に課題を抱える子ども達の情緒面の発達を踏まえて～」	講師：前新宿区特別支援相談員 長谷川 安佐子 先生	134		
	南	12月7日	14:30	大田区立南蒲小学校	「特別支援教室で求められる学習動作の指導について」	講師：神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部教授 作業療法士 笹田 哲 先生	98		
	多摩南	12月7日	14:30	にしみたか学園 三鷹市立第二中学校 体育館	「援助要請ができる子どもを育てる」	講師：Space Zero PDD 心理・教育研究所所長 水野 薫先生	155		
	多摩北	12月7日	14:30	昭島市立つつじが丘小学校 体育館	「特別支援教室でつきたい力を考える」	講師：西東京市教育支援アドバイザー 渡辺 圭太郎 先生	85		
	第6回ブロック研修会 合計(人)							604	
会報「みちびき」137号発行	本部	12月	会報「みちびき」137号発行 公立幼・小・中学校等全校配布 計2300部						
東京都教職員研修センター教育課題研究発表会	本部	1月	13:00	東京都教職員研修センター	ポスター発表				
第7回ブロック研修会 (区市町村地区研修)	地区	2月8日	14:30	各地区において 参加者人数は集計していない					
会報「みちびき」138号発行	本部	3月	会報「みちびき」138号発行 公立幼・小・中学校等全校配布 計2300部						
令和3年度活動報告資料	本部	3月	平成3年度活動報告資料発行						
全研修会参加者合計(人)							4536		

令和4年度 東京都公立学校情緒障害教育研究会 活動計画			
月	日	曜	研修会名、事業名
4	12	火	企画運営本部委員研修会
		火	第1回 企画運営本部会・役員会
	19	火	令和4年度 定期総会・記念講演会
		火	地区ブロック本部会（5地区合同）
5	10	火	企画運営本部委員研修会
	24	火	第1回 地区ブロック研修会（都情研入門）
	-	-	●都情研実態調査（全地区、基準日5月1日）
6	7	火	企画運営本部委員研修会
	21	火	第2回 地区ブロック研修会（都情研入門）
7	5	火	企画運営本部委員研修会
	12	火	第3回 地区ブロック研修会（教室・学級運営）
	21	木	企画運営本部委員研修会
	22	金	第7回 夏季研究大会（北ブロック大会） 第2回 企画運営本部会・役員会（昼）
	-	-	★東京都教育委員会との連絡会
	-	-	◆会報「みちびき139号」発行
	-	-	
8	上旬	○	企画運営本部委員研修会
	19	金	中学校課題研修会
	-	-	★三連協（都難言、都弱視）
9	6	火	第4回 地区ブロック研修会（専門研修①）
	27	火	企画運営本部委員研修会
10	11	火	第5回 地区ブロック研修会（専門研修②）
	25	火	企画運営本部委員研修会
11	15	火	第7回 秋季セミナー
12	6	火	第6回 地区ブロック研修会（専門研修③）
	13	火	企画運営本部委員研修会
	-	-	◆会報「みちびき140号」発行
1	17	火	地区ブロック本部会（5地区合同）・企画運営本部委員研修会
	24	火	企画運営本部委員研修会
2	7	火	第7回 地区ブロック研修会（各区市町村）
	21	火	第3回 企画運営本部会・役員会
3	7	火	企画運営本部委員研修会
	-	-	◆会報「みちびき141号」発行 ◆都情研「令和4年度 活動報告」発行

◆今年度を振り返って

令和三年度もまた、新型コロナウイルス対策に明け暮れる一年だった。四月に初めて「まん延防止等重点措置」が発令され、下旬には三回目の緊急事態宣言に切り替わった。南ブロック本部が担当した定期総会は、宣言発令直前となってしまった。開催地の品川区の様子も伺いながら規模を縮小して対応したが、当日は品川区教育委員会教育長のご挨拶をいただいていた。きちんと開催できたことが嬉しかった。しかし、五月のブロック研修会は中止せざるを得なかった。

一年間延期されていた東京オリピックは、四回目の緊急事態宣言の中で開会式を迎えた。中学校の特別支援教室の全校設置が完了した今年度、八月に計画した中学校課題研修会に注目が集まっていたが、動画収録のみで後日視聴に計画変更せざるを得なかった。

ワクチン接種が進み、小康状態の中での各ブロック研修会の専門研修、第六回研究大会兼秋季セミナーは、対面形式も交え、ほぼ予定通り実施することができた。

一年間を振り返ってみると、中止は二回だけで、あとはすべて計画通りに研修会等を行うことができた。運営にあたった先生方、黙々と消毒作業等のお手伝いをしてくださった方々に感謝しつつ、止まらずに前へ進みたい。

企画運営本部総務 上山雅久

令和三年度 都情研夏季研究大会兼秋季セミナー 記念講演（抄録）
『特別支援教室の指導内容とは』

ASDを中心に年代ごとの発達課題を考える』

Space Zero PDD心理・教育研究所

水野 薫 先生

紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ず、誠に残念です。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。（広報担当）

発達障害教育が目指すもの

発達障害の教育で目指すものは、最終的に社会に出て、自分らしく生きていけるということが大事だと思います。しかも発達のな、知的な能力はどちらかというと標準の人が多いわけで、自分の力で切り開いていかなければいけないのではないかなと思います。

土台となる指導課題は、学習態勢、基本的行動様式、あるいは家庭で言うならば、身辺処理のようなもの。それから、体です。発達障害という点、読み書きだ、友達関係だということけれども、体がしっかりできていないと社会性もあつたものではない。「はさみが上手に使えない」、「鍵盤ハーモニカがうまく使えない」。中学生になったら製図などをします。

だから、そういう体をつくっていかなければならぬ。これは基本です。土台になるものであると同時に本質的な課題です。そして、ソーシャルコミュニケーション。これは正に本質的な課題です。この子たちが大きくなったらどんな姿になるかな、今何をしたらよいかを考えながら、保育や教育にあたってください。最終的には自分を前向きに受け止める。それから、自立をしていく。生活の充実を目指すということが教育の最終的な目標です。これは特別支援だけでなく、一般の教育にも同じことが言えると思います。

発達課題とは、それぞれの年齢によって求められる解決すべき課題と私は定義したいと思います。年齢によって求められる範囲は非常に広いです。

乳・幼児期の姿と発達

まずは、乳幼児期についてです。生まれてから学校にあがるまでの間、これは一番人生のうちで変化が大きい時期です。この時期から社会性はもう育ち始めています。発達障害と言われる子供たちは、

後からどうこうというよりも、もともとそういう特性をもって生まれてきた人たちであるということとは、よく頭の中に入れておかないといけません。虐待、ネグレクトを受けた子供たちと、ADHDとかアスペルガーの人たちの行動は非常によく似ているのです。この子たちの脳の研究をすると、自閉の人やADHDの人と同じような脳の病変があります。しかし、これは後からできたもので、発達障害の子と同じ対応をしてもそう簡単に改善するものではありません。しつけの問題です。しつけの問題なら、やはり対応は発達障害の対応だけではなくて、保護者へのアドバイス、あるいは福祉や家庭の中に入れる専門家の力を借りるということも必要になってきます。

小学校低学年の発達

低学年になってくると、幼児期の土台をもとに社会性や言語が急速に発達します。それから、心の理論が一応完成してきます。言葉は結構伸びていますから、言葉でのやりとりができない子供は、なかなか集団には入りにくいという時期です。あと、脳機能という点から見ると、体の機能がほぼ完成してきます。視覚とか聴覚、運動。これに伴って当然のことながらスポーツ的なもの、体育的なもの、道具の扱い、それから、芸術的なもの、いろいろなもの

具体的な体験から物事を考えます。全然知らないこと、経験したことがない、見たことがないようなことはまだ考えられないです。具体的操作期、具体物とか半具体物を通して学んでいく。だから、小学校一、二年生の生活科というところ、校内を探検したり、朝顔を観察したり、町探検をしたり、とにかく具体的に動いて、そうやって世の中を認識していくのです。こういう経験が十分でない子は、大きくなって必ず引っかけたててしまします。知能検査の数値がどんなに高くても、例えば三年生になると出てくる総合的な学習の時間などに自分で調べてまとめるとき、詳しくまとめられるけれども、どういふふうにして調べる計画を立てたらいいか、どうやってプレゼンしたらいいか、こういったところには弱さが出てきます。そういうことがこの時期の体験が十分でないこと起こってきます。

低学年の特別支援教室の子供たちによくみられる姿

平仮名、片仮名が覚えられない、出てこない子がいます。その背景にあるのは、何なのか、言語発達に遅れがあるのか。文字は覚えませんが、それを十分に使いこなせるようになってから引っかけようというところがあります。この文字や数の指導については、原因を探るのが支援教室の役割で、それから先のことは在

籍学級で少人数学級にするとか、何らかの手だてを考えてもらうのが筋ではないかなと思います。

教室から出ていってしまうとか、友達とトラブルが多いとか、暴力暴言が絶えないとか、適応状態が悪い子が、ADHDではないかなと言われることがあります。しかも、ADHDの子というのは叱られること、注意されることが多いから、ちよつとしたことで敏感になって、怒ってしまうとか、泣いてしまうとか、暴れてしまうことがあります。小さいときから少し失敗したら殴られたとか怒鳴られたとか、そういう子供は荒っぽくなってしまうのです。これは障害ではないです。間違つてそういう対人パターンを学んでしまった。もちろん、愛着障害や虐待、ネグレクトの子供は、落ち着こうとしたつて落ち着けないです。だから似たような行動が出てきます。この辺の見極めをするのも支援教室の役割ではないかと思えます。その子が成長してきて、自己理解が進むまで、対処法を自分で見い出せるようになるまで指導が必要だと思うのです。でも、虐待とかネグレクトとか不幸なしつけをされてしまった子供の場合は、別の機関できちつと見ていただいた方がいいのではないかと思えます。

小学校中学年の発達

中学年になつて表面化すること

中学年というのは、子供の社会性

の発達で、随分変わる時期です。段々に子供の社会性が発達すると、自分と興味関心が似ているもの、同じようなことをやりたい子供たちが固まつて、小さい時には二三人、大きいと十人くらいでグループ化していきます。その時に発達障害の子供たちがうまく入れない。友達が欲しい、友達と遊びたい、それから一部は、友達を支配したいと思う子がいいます。こうなつてきた時に、おかしな自己主張、あるいは人を押搦するようなことが出てきます。そういう時、周りの子供たちは「あいつがいると面白くないから」とさつといなくなつてしまつたりするので、それをいじめられた、はぶられたいというふうに受け止めてしまいます。ここで先生が周りの子供たちに「そんなことをしてはダメですよ」と言つたつてダメですね。どちらにもそれぞれの言い分があるので、それを聞いていかなければいけません。仲間関係も、もつと年齢が高い人たちのような深いものではないのだけれど、やはり違和感を与えてしまう人に対しては、かなり強い言葉を発します。それがいいのだと子供たちは気付いていないのですが、これは気付かせなければいけません。「そういう言い方はどうかな」と問いかけて。でもこれは主に通常の学級での仕事です。特別支援教室では、周りの人が不愉快になるような言動をとつていことに気付かせ、どういふふうに直していけばい

いかを指導します。これを個別でやるうとしたら、まず無理ですよ。仲間がいなければ、できないです。相手に対して言つてみたら全然反応してくれなかつたと怒る子もいるのだけど。「あなたの言い方ではみんなは通じないよ。あなたは星のことが好きかもしれないけれど、B君は動物が好きなんだよ。じゃあ、どうしましょう」という折り合いを付けるとか。こういう指導をしていかなければなりません。やはり自分の意図の違和感、人に与える違和感に気付くことは難しいです。いわゆるソーシャルスキルトレーニングは、どちらかというと、私はあまり効果がないと思えます。もうちよつとコミュニケーションの要素をしつかり入れる。相手の立場を考えると、うよりも、自分に照らし合わせて、僕ならこうする、私はこう思うのだけどというものがなければいけません。

もう一つは生活のスキル。学習態勢も含めた生活スキルがきちんと育つていかないと、自己理解も深まりません。中学年というのは割と曖昧なのだけれど、難しい時期です。それから、自己管理とか自己責任を果たせない子が出てくる。忘れ物が多いとか、落とし物、それから宿題をやらぬ、勝手なことばかりしてしまうなど。ADHDの子はやる気はあつても、時間配分がうまくいかなることがあります。ASDの子は自分のやり方にこだわつてしまいま

す。ここは、特別支援教室と一緒に考えてあげないといけません。刺激を少なくした中で自分のやるべきことをきちんと思い出させるなんていうのも、ADHDの子にとつては大事です。支援教室できちんとやつて、在籍学級の先生にも「刺激の量を減らしてください」とか「メモのためのサブノートのみたいな物を工夫していただけないでしょうか」と見本を支援教室の方から提示します。在籍学級との連携がとても大事です。

小学校高学年の発達

高学年になつてくると、また大きく変わるのです。大体十一歳くらいで大人の脳に変わつていく、成長していきます。そうすると抽象的な思考ができるようになります。形式的思考、全然経験してないこと、全く知らないような初めてのことであつても、これまでの経験とか頭の中の知識とかを駆使して、大体こんなものだと予測を立てて課題解決をしていけるようになります。だから、詰め込みで学習してきた子は、この力が育たないです。この力が小さい時から育つには、数々の失敗、友達とのけんかとかも含めて、失敗をしてそこから、じゃあどうしたらいいだろうというふうにみんな考えていく。あるいは、先生と個別に考えていく。教室の中で友達の話うことを「あれいいね、いただき」というのを経験しながら、全く知ら

ないことでも、あの時のあれが使えるかもしれないという発想、これは全部無意識のうちに行っている。それができてきます。教科でも、いろいろな事象を知識に基づいて推測していく、それで解決していくということが、徐々にでき始めます。これは高学年の力なのです。

発達差が大きくなる時期

この時期になると、発達の差がとて大きくなってきました。それから、得意・不得意もはっきりしてきます。理系の方、文系の方、芸術系の方、体育会系の方などいろいろというらしやるかと思いますが、段々そういうのが出てきます。中学生になると、もつとはっきりしていきます。もう個性が出て当たり前の年齢ですよね。

大人が分からない中での交友関係が出てきますよ。特に思春期の入り口です。親に知られたくない、先生に知られたくない何か悩み事があったとき、誰に相談するか。一番は友達です。中学生だと友達です。それから部活の顧問や先輩です。その次に親が出てきて、先生は全然出てきませんでした。今ならスクールカウンセラーが出てくる可能性があるかもしれません。大人を嫌がる年代に入ってきます。

発達課題だけでは語れない中学生期

次に、中学生です。難しいですね。発達障害の発達課題だけで語れる

かというところ、それは違います。小学生とは随分違うと思います。思春期というのは、大人を踏み台にして育つと私はよく話しています。アイデンティティの確立のために大人を踏み台にすることはとても大事なことです。

しかし、気を付けなければいけないのは、ASD特性がある人たちは自分の考えに凝り固まってしまつて、それを受け付けない大人をやつてしまつてしまつて。徹底的に反発して一から十までやらないという子も出てきます。これは、特別支援教室では対応できないと思います。

また、憧れの君、現実の相手であればいいけれど、バーチャルな彼女に憧れてしまうことがあります。それに憧れて会えなくて苛々することがあります。親が、パソコンばかりやっているからと取り上げて、それで荒れてしまうこともあります。特に、発達障害の人は現実の人間関係をもつことが苦手なので、そういうバーチャルな世界での人間関係と現実の世界との境目があまりなくなつてしまします。私は基本的にこれは現実に戻す必要があると考えています。でも、現実に戻すと言っても、先生も一度はその世界に入らないといけないと思います。あるいは彼女にとつてとても大事なものを、先生が知らないのではないです。そういうふうに行われたときにASDの人は「見捨てられ

た」と受け取ります。私の仮説ですが、自閉症の人は対人関係の上での上手な切り替えができないのではないかと思います。だから、否定をされると、All or Nothingになつてしまします。

異性関係においても同じです。ある男の子に憧れて、その子を追いかけ回して家まで行つてしまつて、警察を呼ばれてしまつた子もいます。こういうときに、「そういうことをやったらダメだ」という言い方をしたら、ASDの子はものすごく傷つきます。「なぜ。だって、僕はあの子が好きなんだよ」と言うのを受け入れた上で、「同じことを何度も何度も繰り返されたら、相手はどう思うかを先生と一緒に考えてみよう」といろいろなシミュレーションをしたり、コミック会話のような、人の絵を描いてそれでやりとりをしたりしながら、自分の内面にある自己中心性に気付くようにしていきます。これは、心の理論の障害に起因するものなのでなくすことはできないけれど、自分が中心になつてしまつて周りの人が動いてくれるのが当たり前と思ひ込んでしまつていくところを改善していかなければなりません。バーチャルな世界にのめり込んでいる人は現実の人間関係をもてない人が多いですから、先生との一対一の関係、そういうところから少しずつ広げていかなければいけないかと思ひます。一般的な生活指導とは違う対応を求めら

れるのではないかと思ひます。

大人とのいろいろな確執の中で自分というものに気付く時期です。これはとても大事で、そのときに大人に對してもものすごく批判的なことも言ひます。これに對して「いけないよ」と言ひてはいけません。「もう少し話を聞かせて。先生はそういう考えはしてないんだけど」と言ひつて、人と自分の違いに気付かせると同時に、自分はそのように理屈っぽく考える特性がある人だ、誰もがみんなそうではないのだということにも気付かせないといけません。場合によつては、中学生ならグループでデイバートのようなものをするなど、デイスカッションの中で他人の意見を受け入れる、そして自分の違いに気付かせるのです。

失敗に弱い時期でもあります。小学生よりも、失敗に傷つきやすい時期です。失敗は指導の大事なチャンスです。ただし、とても失敗したときにグループでそれを取り上げるのはしない方がいいと思ひます。個別指導の中で取り上げます。家庭で起こつたことでも在籍する学級で起こつたことでも社会で起こつたことでも、じっくり考えることが大事です。考えられない子には、ヒントをあげたり視覚化したりします。仲間意識も難しいです。「自閉症の人は人付き合いを好まない」と言ひますが、むしろ強固な人間関係を築いてしまつてそこに他の人が入れず、その中でぐちゃぐちゃと

揉めて大変になるということがあります。

大人についての批判でくつつくグループもあります。あの先生が気に食わないということでもまとまって悪さすることがあります。ASDの子はリーダーシップをとるのが大好きですから、それをもとに授業妨害やテスト妨害というのが実際にあります。周りが巻き込まれないように指導するということも必要ですし、本人への指導も大事だと思います。

いじめ、異質なものを排斥する気持ちは、小学校の中学年頃から出てきますが、更に中学生になると厳しくなります。理屈もつけてきます。できれば小学生のうちに、いろいろな考え方があっていろいろな人がいるということに気付き、適度な距離を置いて嫌な相手を無理に巻き込まないようにするということを指導しておく必要があります。そうしないと、中学生でうまく乗り越えることができません。

避けて通れない受験についてです。中学生は卒業したら義務教育が終わってしまいます。どうするかを真剣に考えてあげないといけません。例えば、発達障害の子が小中一貫校や進学校に入り、同じような学力の子たちが集まります。そうすると、今まではトップでいた子がトップ集団にいられなくなる可能性があります。これで落ち込んでしまつて大変です。だから、進学先を選ぶと

きに発達障害の子については、偏差値も大事ですが、コミュニケーション場面や社会性の場面でのくい力を発揮できるかということも考慮しなければなりません。それから、勉強以外のもの、スポーツでも芸術でも他愛のないものでもいいですが、そういうった趣味をもっているかということを見極めなければなりません。通級指導教室、特別支援教室は受験指導する場ではないのだけでも、考え方を変えていくための指導は大切だと思います。

ゆがんだ仲間関係の理解…いじめに注意

いじめの予防や対応については、在籍校での学級経営やホームルーム経営、生活指導が基本です。特別支援教室では、自己表現や自己調整がうまくできない児童・生徒にそれを指導する必要があります。べらべらと自分のことは話すけど他人の話を聞かない子や、逆に相手から言われると何も言えない子がいます。こういう子たちには、年齢が高くなってもコミュニケーションの指導はしなくてははいけません。具体的な場面を想定した指導が必要です。

発達障害の子の場合に一番心配なのは、仲良しグループのゆがんだ連帯感です。グループの中ですったもんだすることが多いです。子供たちは、友達が欲しいけどもうまくつくれない。そこで、つっぱりたちの餌食になってしまう子も一部いま

す。そこに、つっぱりではない大人しい子たちがくつついていて、強要するのは、避けなければなりません。

大人しいなら大人しいその子たちの共通の話題や興味・関心で助け合えるようにしてほしいと思います。そこは教師が見なければいけません。そのところを在籍校の先生に全部見てくださいというのは難しいと思います。子供たちが在籍校で辛い思いをしているときには、特別支援教室で取り上げてほしいです。特に表現の苦手な子は苦しいです。先生に「どうしたの」と聞かれても、すぐに答えられません。だから、在籍校で先生が放課後に残して聞いてくれても答えられないような子供は、おそらく特別支援教室の先生の方がその子に合った聞き出し方を心得ていると思いますので、在籍校と連携してやっていかなければなりません。

いじめられていることに気が付かない児童・生徒がかなり多いです。これは、気が付いたときは、ものすごく傷付いていて修復できなくなっていることもありますので、先生方が早く気付いて在籍校と特別支援教室で連携して、子供が乗り越えられるようにしてほしいと思います。ASDの子は、いじめられているという意図が読めないです。だから、仲良しのふりをしていじめをやられていると、相手をいい人と捉え

てしまいます。でも、最終的にはその子はいじめられていることに気付いて、ものすごく傷付いて落ち込みます。気が付かなかった自分を責めます。そういうところを先生方が注意して見ていただけたらと思います。

○令和四年度「定期総会」案内

【日時】令和四年四月十九日(火) 十四時開始予定

【場所】調布市グリーンホール (京王線 調布駅下車)

【記念講演】

「通級システムにおける発達障害の社会性指導はいかにあるべきか」オーダーメイドSSTとパッケージ化されたSSTの効用と限界(一)(仮)

【講師】北海道大学 准教授 岡田 智 先生(予定)

※都情研HPから申し込みの上、ご参加ください。(申し込み開始は四月一日の予定です。)

※新型コロナウイルスの状況等により、変更・中止する場合があります。中止の決定が直前になる可能性がありますので、当日に都情研HPで必ずご確認ください。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたら左記までお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック広報係

世田谷区立明正小学校

廣田智仁

☎03・3415・5597